

本誌主催Xデー勉強会in MS

タブーなき議論で見えてくる ビジョンへの決断力

「『自分が局にいる間、放送はこのままだろう』と考える方は参加する必要がない」。強烈な案内メッセージとともに開催された本誌主催Xデー勉強会「放送の今後とICTプラットフォームの展望をつかむ」。インターネットも取り込んだ放送サービスを、より多彩なコンテンツサービスへと進化させるべく約2時間にわたる「タブーなき議論」が展開された。(構成:高瀬徹朗・本誌レポーター)



坂村教授が提言する 「放送業界の変革」

「プラットフォームは『囲い込み』ではなく『オープン性』にこそ意味がある」をテーマに基調講演を行った東京大学名誉教授・東洋大学INIAD(情報連携学部)学部長の坂村健教授は、約40分間の登壇中に幾度となく強い言葉で「放送業界の変革」を訴えた。

坂村教授はまず、インターネット時代においてさまざまなメディアが変革を迫られてきた現

状について指摘。「デジタル化によってすべてのコンテンツが数字の列となり、文字も音声も動画もインターネットの先につながり、反応が早くなったことでキャストとデマンドの差もなくなった」と説明した。

一方、新聞、書籍、雑誌といった同じ紙媒体であっても「コンテンツの性質」によって最適なサービスが異なっていることに着目。さらに、同じ雑誌媒体であっても、デジタルサービスの状況にかかわらず、単行本の売り上げが一定以上期待できる漫画雑誌は性質が異なることな

どを指摘し、「性質の違いを意識することが最も重要」という考えを示した。

「放送、という枠でくっつけて考えているのは、いつまでも正解にたどりつけない。例えばドラマならば、漫画のように視聴後もセットでまとめ買いすることはあるだろうが、バラエティ番組でそうした行動は考えにくい。こうしたコンテンツごとの質の違いを見極めなければならない」(坂村教授)。

また、「枠」の撤廃は、放送の未来を考えるうえでも必要になると指摘。「電波放送だからこそその運命共同体であった制作スタッフ、技術スタッフ、記者、タレント、タレント事務所、広告代理店などが、バラバラの運命をたどる。それを無視して情緒的な議論をすると混乱するだけで、建設的議論にならない」(同)。

そして、放送という概念がバラバラになった先として、動画コンテンツを楽しむ視聴者が確実に存在し続ける中で求められるのが、「オープン性」である、と強く主張した。

技術設計ではなく制度設計を

坂村教授によれば、日本はIoTおよび、そこに求められるオープン性において、世界に大きく出遅れているという。

必要な要素技術を持ちつつも出遅れている原因は、日本人特有のクローズ志向。「得意の